

4 遅まきたまねぎの生育と収量

ねらいと成果

淡路地域のたまねぎの作型(年内植え)は、9月20~30日には種し、11月上旬~12月下旬に定植する。しかし育苗時に台風被害の危険性があり、過去56年間で、9月下旬以降に接近した台風は平均0.6回/年であった(洲本測候所1950~2005年)。

そこで、は種期を10月上旬に遅らせても収量低下はなく、台風被害の回避・軽減が可能で、育苗時の剪葉作業も簡素化できることを明らかにした。

内容

2006、2007年度の2カ年、当地域の主要品種である早生“七宝早生7号”、中生“ターザン”、中晩生“ネオアース”(年明定植に推奨)、晩生“もみじ3号”のは種を、慣行(ほぼ9月下旬)、10月10日、10月20日、10月30日頃に行い、324穴露地セル育苗ののち、年内に定植した(表)。

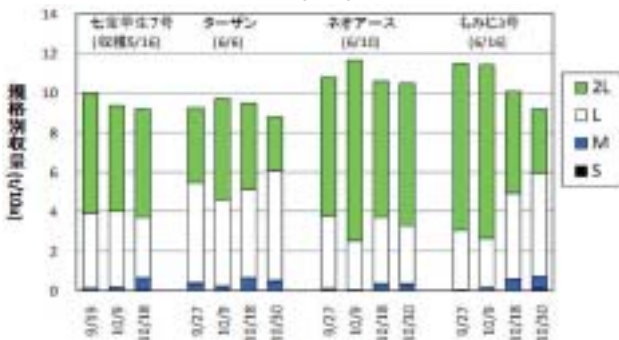


図 は種期の差異と収量(2007年度。横軸は、は種日。)

いずれの品種も、は種を10月10日頃に遅らせることで、殺菌剤の散布を要する剪葉を1~2回削減できた(表)。その際、定植時の苗重は、早生種で慣行の38%、中~晩生種で同75~83%となったが(表、2007年度)、機械定植に支障はなかった。なお台風の接近頻度は、10月10日以降で5~6年に1回、10月20日以降では20年に1回以下となる。

収量については、は種を“七宝早生7号”“もみじ3号”は10月10日頃、その他品種は10月10~20日頃まで遅らせても、明瞭な低下はなかった(図、表)。ただし中晩~晩生種では、遅まきに伴い倒伏が遅れ気味になり、収穫期に多雨となった2007年度の“もみじ3号”でそれが顕著であった。貯蔵性も2007年度に限り、遅まきにより低下した(表)。

以上のことから、遅まきは早晩性にかかわらず10月10日頃までが有望である。中晩~晩生種では貯蔵性の低下のおそれがあるが、は種期が悪天候の場合や、苗床が被災した際のまき直しに利用できる。

今後の方針

さらなる品質評価(形状、内容成分、貯蔵性)を行う。また慣行地床育苗への適用性を調査する。

大塩 哲視(環境・病害虫部)

(前 淡路農技セ 農業部)

(問い合わせ先 電話:0790-47-2420)

表 遅まきによる生育収量等への影響(2007年度。中~晩生種のは種10/30は記載省略。)

品種 定植~収穫 (月/日)	は種日 (月/日)	剪葉 回数	育苗 日数	定植苗 茎葉重 (g/株)	収量比 (%)	吊り貯蔵 健全率 (%)	は種10/18 の傾向**
七宝早生7号	9/19	4	69	3.4	100 (10.0t/10a)	—	変形球少ない。
	11/27~	2	49	1.3	94	—	
	5/16	1	40	0.7	92	—	
ターザン	9/27	5*	85	3.0	100 (9.2t)	70	倒伏への影響
	12/21~	3	73	2.5	106	68	小さい。
	6/6	1	64	1.2	103	68	
ネオアース	9/27	5*	85	3.2	100 (10.8t)	74	変形球増加。
	12/21~	3	73	2.4	108	66	やや
	6/10	1	64	1.4	99	50	倒伏の遅れ。
もみじ3号	9/27	5*	85	3.0	100 (11.5t)	62	変形球増加。
	12/21~	3	73	2.3	99	42	明らかな
	6/16	1	64	1.3	88	27	倒伏の遅れ。

定植と収穫は、は種日にかかわらず品種ごとに同日に行った。 *通常は4回。 **遅まきの安全性の参考。